

<特集「情報構造と名詞述語文」>

イタリア語における情報構造と名詞述語文 Information structure and nominal predicate sentences in Italian

土肥 篤
Atsushi Dohi

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 特集「情報構造と名詞述語文」におけるアンケートに回答する形式でイタリア語の例文を提示し、コメントをつける。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on modality in *Journal of the Institute of Language Research* 21, 2016, Tokyo University of Foreign Studies with Italian data.

キーワード: イタリア語、情報構造、名詞述語文

Keywords: Information structure, nominal predicate sentences, Italian

1. はじめに

情報構造と名詞述語文は、ともにイタリア語学において盛んに研究されるテーマである。代表的な研究にはたとえば、前者については Lombardi Vallauri (2009)、後者については Moro (1997)が挙げられる。また、情報構造に関連してカートグラフィー・プロジェクトの創始者である Rizzi (1997)が主にイタリア語を観察の対象としている点も、イタリア語学においてこうした論点がしばしば議論の俎上に上がってきたことを示唆していると言える。

以下では、2.としてアンケートへの回答¹とそれぞれの文の簡単な解説を示す。

2. アンケートの回答

(1) えっ、A (固有名詞) が来たの? / いや、A じゃなくて B が来たんだ。

| | | | | | |
|-------|-----------|-----------|----|-----|----|
| - È | venuto | A? | | | |
| is | come.PTCP | A | | | |
| - No, | è | venuto | B, | non | A. |
| no | is | come.PTCP | B | NEG | A |



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ アンケートへの回答にあたっては Diego Cucinelli 氏 (Università degli Studi di Firenze) にご協力いただいた。ここに感謝申し上げます。データの解釈における不備は、すべて筆者の責任である。

焦点は、主語を動詞に対して後置することで表される。イタリア語ではこのように、旧情報が先に、新情報が後に来るといふ原則があると言われている (Antinucci & Cinque 1977)。ただし、イタリア語では自動詞²を使った文において情報構造上有標の解釈を生むことなく主語を動詞に対して後置することができる。

- (2) 誰が来たの? / A が来たよ。
 - Chi è venuto?
 who is come.PTCP
 - È venuto A.
 is come.PTCP A

(1)と同様に、新情報である主語の動詞に対する後置によって表現される。

- (3) A のほうが大きいんじゃないの? / いや、A じゃなくて、B のほうが大きいんだよ。
 - Non è più grande A?
 NEG is more big A
 - No, il più grande è B, non A.
 NEG the more big is B NEG A

疑問文においては、(1)および(2)と同様に主語の動詞に対する後置が現れる。一方、応答ではいわゆる倒置コピュラ構文 (inverse copular construction; Moro 1997 を参照) が使われる。

- (4) (電話で) どうしたの? / うん、今、お客さんが来たんだ。
 (Al telefono) - Che è successo?
 at.the telephone what is happened
 - È arrivato un ospite.
 is arrived a guest

無標の語順が現れる。主語が動詞に対して後置されているのは、(1)に述べた通り自動詞を用いた文ではこの語順が無標の情報構造を表し得るためである。

- (5) あの子供が A を叩いたんだって! / いや、A じゃなくて、B を叩いたんだよ。
 a. - Quel bambino ha picchiato A!?
 that boy has beat A
 - No, lui ha picchiato B, non A.
 no he has beat B NEG A

新情報が後に来るといふ原則は守られているものの、無標の語順と表面上は変わらない。焦点の解釈は、イントネーションおよび non A 「A ではなく」によって伝えられることになる。なお、分裂文を使った次のような表現も可能である。こちらの場合には、構文によって焦点が示されていると言える。

² より厳密には、自動詞 (verbi intransitivi) および非対格動詞 (verbi inaccusativi)。

b. - No, è B che è stata picchiata da lui.
no is B that is been beat by him

(6) 赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買うの? / (私は) 青い袋を買うよ。

- Ci sono una borsa rossa e una blu, quale compri?
there are a bag red and one blue which buy.2SG
- Compro quella blu.
buy.1SG that blue

「どちら」は疑問詞 *quale* によって表される。また、日本語では繰り返される「袋」はイタリア語では繰り返さず、質問文では *una blu*、応答文では *quella blu* となるのが自然である。

(7) A はどこですか? / A は朝からどっかへでかけたよ。

- Dov'è A?
where.is A
- A è uscito presto stamattina, ed è andato da
A is left early this.morning and is gone from
qualche parte.
some part

無標の語順である SV が現れる。

(8) (あの子供は) 誰を叩いたの? / (あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。

- Quel bambino chi ha picchiato?
that boy who has beat
- Ha picchiato suo fratello.
has beat his brother

疑問文では、主題として「あの子供は」を明示する場合には疑問詞 *chi* 「誰 (を)」より前に出てくることできる。また応答では、文脈上明らかであるため主語は明示されないのが通常である。

(9) (電話で) どうしたの? / うん、A が (自分の) 弟を叩いたんだ。

- Che è successo?
what is happened
- A ha picchiato suo fratello.
A has beat his brother

(4)と同様に、無標の語順が現れる。*picchiare* 「叩く」は他動詞なので、SVO の語順となる。

(10) あのケーキ、どうした? / (ああ、あれは) A が食べちゃったよ。

【目的語主題化、主題 (目的語) の継続性 いわゆる *pro-drop* 言語の可能性】

- Quella torta che fine ha fatto?
 that cake what end has done
 - L'ha mangiata A.
 it.has eaten A

質問文ではケーキを文頭に置いて主題にした疑問文にすることができる。なお、この文では「あのケーキ」*Quella torta* は主語である。一方で応答文では新情報である A を動詞に後置された主語として置き、「ケーキ」は目的語代名詞 (I') として残すのがこの文では最も自然である。文法上は *quella torta* 「あのケーキ」を応答文の文頭に置いて主題化することも可能であるが、あまり自然ではない。

(11) 私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ。

a. Quello che ho comprato ieri al negozio è questo
 that that have bought yesterday at.the store is this
 libro.
 book
 b. È questo il libro che ho comprato ieri al
 is this the book that have.1SG bought yesterday at.the
 negozio.
 store

二種類の分裂文が考えられる。(11b)では、店にあった複数の本から（他のものではなく）これを買った、という対比のニュアンスが加わる。

(12) あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。

Lui è un insegnante. Lavora in questa scuola da
 he is a teacher work.3SG in this school from
 tre anni.
 three years

二つめの文では主語が明示されず、三人称単数の活用および文脈から一つめの文における *lui* と同一指示関係にあることが理解される。

(13) 彼のお父さんは、あの人だ。

Suo padre è quel signore là.
 his father is that man there

イタリア語では、同定文と倒置同定文は主語と述語の交替以外に違いはない。

(14) あの人が彼のお父さんだ。

Quel signore là è suo padre.
 that man there is his father

- (15) あさってっていうのはね、明日の次の日のことだよ。

“Dopodomani” significa il giorno successivo a domani.
day.after.tomorrow means the day next to tomorrow

動詞 *significare* 「意味する」を用いるのが最も自然である。他には、同じ意味の *voler dire* (直訳すると「言いたい」) を使うこともできる。なお *essere* を使ってコピュラ文にすることも可能である。

- (16) 何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて) 私はコーヒーだ。

a. Per me un caffè.
 for me a coffee
b. Io prendo un caffè.
 I take a coffee

イタリア語では、うなぎ文に類するコピュラ文は現れない。(16a)のように前置詞 *per* 「～のために」を使って表現するか、「私」を主語にするのであれば *prendere* 「取る、注文する」のような動詞を使う。

- (17) [(注文した数人分のお茶が運ばれてきて) どなたがコーヒーですか?との問いに] コーヒーは私だ。

a. Il caffè è mio.
 the coffee is mine
b. Per me.
 for me

店員の質問に応じて、(17a)のように「私のものです」と言う場合や、(17b)のように「私のためです」と言う場合がある。なお、そもそもイタリア語で店員が「どなたがコーヒーですか?」に相当する質問をすることはなく、「どなたがコーヒーを注文しましたか?」であれば *Io* 「私です」と答えることもできる。

- (18) その新しくて厚い本は (値段が) 高い。

Quel libro nuovo e voluminoso è piuttosto caro.
that book new and voluminous is rather expensive

併置される二つの形容詞は修飾する名詞に対して後置された上で接続詞 *e* によってつながられる。これに対して、コピュラ文の述語になっている形容詞は動詞 *essere* を挟んで文の最後に現れる。

- (19) (砂糖入れを開けて) あっ、砂糖が無くなっているよ!

Ah, lo zucchero è finito!
ah the sugar is finished

- (20)と異なり、直説法現在形が使われる。

(20) 午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ？ あっ、そうだ、田中君だったな。

| | | | | | | | |
|--------|------------|--------------|--------|-----------|-----|------|----|
| Nel | pomeriggio | dovevo | vedere | qualcuno. | Ma | chi? | Ah |
| in.the | afternoon | must.1SG.IMP | see | someone | but | who | ah |
| si, | Tanaka! | | | | | | |
| yes | Tanaka | | | | | | |

こうした文では、直説法半過去が現れる³。二つめの文以降は自然な表現では動詞が現れないこともあるが、動詞 *essere* 「～である」の直説法半過去 *era* を使った *Ma chi era?* や *Ah si, era Tanaka!* も可能である。また、特に二つめの文では同じく動詞 *essere* の直説法未来を複合時制⁴にして *Chi sarà stato?* とすることもできる。

参考文献

欧文

- Antinucci, Francesco, & Guglielmo Cinque. 1977. "Sull'ordine Delle Parole in Italiano: L'emarginazione." *Studi Di Grammatica Italiana* VI, pp. 121-146.
- Lombardi Vallauri, Edoardo. 2009. *La Struttura Informativa: Forma E Funzione Negli Enunciati Linguistici*. Roma: Carocci.
- Moro, Andrea. 1997. *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi. 1997. "The Fine Structure of the Left Periphery." In *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, Liliane Haegeman (ed.), 281-337. Kluwer: Dordrecht.

和文

- 風間伸次郎. 2011. 「テーマ企画：特集 モダリティ まえがき」, 『東京外国語大学語学研究所論集』16, pp.29-55.

執筆者連絡先 : atsushi.dohi@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021年12月27日

³ 半過去は、いわゆる未完了過去に相当する。

⁴ 複合時制は、完了形に相当する。